

インドの粘板岩(スレート)加工業: 児童労働を含む労働者環境の課題を焦点にして

大石 高志(国際関係学科・教員)



はじめに

筆者は、南アジアや環インド洋地域の近現代史を研究しており、広域アジアや途上国地域社会について植民地期から現在まで継承されている政治・文化的軋轢や経済的不均衡の問題を論じている。ここでは、以前に調査のため訪れたインド中南部の粘板岩加工業での児童労働を含む労働者環境の問題の要点を、現地の写真を交えながら、予備的にまとめる。

粘板岩(スレート)加工業

粘板岩は板状に掘削できることから(写真1)、フロアリング建材など用途は多い。また相当量が輸出向けで、最近では、毎年6万トン規模にもなり、日本も無縁ではない(Govt. of India 2023)。現在、インドにいくつかの主要採掘地があるが、筆者は、インド東南部のデカン高原丘陵地域にあるマルカプル採掘地とその加工工場を訪問した。



写真1: 粘板岩の採掘(筆者撮影)

粉塵の吸引による肺疾患

粘板岩加工業に伴う労働環境問題の1つは、加工作業の際に飛散する粉塵の吸引とその健康被害である。喘息、胸膜炎、珪肺症などの肺疾患が生じるとされ、警告がなされてきたが、吸引防止の十分な措置が取られているとは言えない(写真2)。

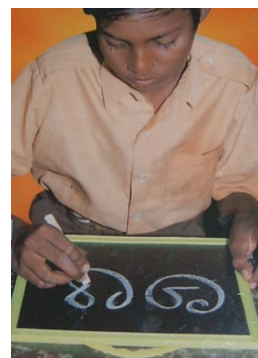
この問題は、アスベスト(石綿)の吸引健康災害という近似的な形で世界的な同時代性も有している。アスベストは、断熱材や防音材として日本でも広く使用されてきたが、吸引により肺線維症や悪性中皮腫などの疾患を引き起こすことが分かり、製造が禁止された。しかし、吸引後の長い潜伏期間による因果関係の証明の困難性なども相まって、問題は継承されている。



写真2: 粘板岩の研磨作業と粉塵(筆者撮影)

児童労働

児童労働は、粘板岩加工業の労働問題のなかで最も顕著なものである。加工した粘板岩の用途には、児童学習用の石盤もある。研磨した粘板岩を木枠で縁取りしてノートの様に使い、石英岩の棒状スティックで書き込む(写真3)。日本でも明治期に石盤や紙製石盤(石粉を紙に塗布)が使用され、紙ノート普及以前の文具として機能した歴史がある(写真4; 唐澤 1968)。インドでは紙ノートと鉛筆よりも安価な貧困層児童の学習用具として現在でも一部で根強い需要があるが、この石盤の製造自体に貧困家庭の児童の労働が及んでいるという現実がある。



左 写真3: 児童が学習用に石盤を使用(ILO ポスター)



右 写真4: 紙製石盤: 明治期(大石所蔵)

また、児童労働は、その家庭が低カーストやトライブ(丘陵地先住民)という社会経済的に周縁化されてきた人々に重なることなど、この問題は複雑で大きい。

ILO 主導の児童労働撤廃に向けた取り組み

ILO(国際労働機関)では 1992 年から児童労働撤廃国際計画(IPEC)を立ち上げて、特定の危険・有害な業種の児童労働を指定しながら、その撲滅に向けてインドを含む各国で活動を行っている。代替の就労・生計を児童や家族に提供することを試みながら教育への復帰を促すことにも特色がある(ILO 2004)。インド政府は、1991 年より導入された新経済政策の改革・開放路線も相まってこの計画に協力しており、相当の事態の改善はあるが、児童の労働が家庭内に持ち込まれて看過されてしまうことなど、なお課題も多い。

半乾燥地域での自然環境と生計

より本質的な問題は、代替の生業や就労の創出が困難なことである。粘板岩採掘地は半乾燥地域の岩盤にあるため、農業の展開が容易ではない。IPEC では、代替の生業として、レンガ製造や牧畜業などの後押しやため池や井戸開削による農地開拓を試みているが、その効果は薄い。粘板岩加工業は、ある意味で、植民地期に敷設された鉄道網を利用して自然資源を活用しながら地域産業として創生したという事実があり、この意味で、植民地支配下で外縁部に拡張された広域経済とその資源活用の「功罪」を背負っていると言えよう(大石 2022)。

アフリカやその他の地域に関して、「資源の罠」や「紛争鉱物」などの言葉で鉱物資源の争奪の混乱の中で本来ならば想定できる経済的成長を果たせず、むしろ社会経済的混乱や搾取、政治紛争に翻弄される状況を指すことがある。こうしたユニバーサルな世界的課題に通底する要素も、ここで、指摘できよう。

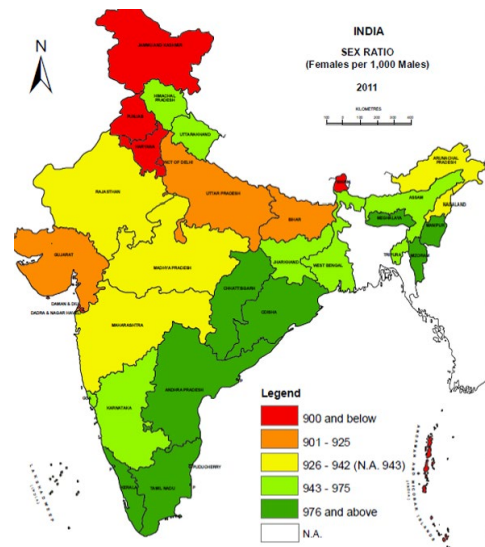
就学復帰:ジェンダー規範の問題

ドロップ・アウトした児童の就学復帰を促す試みは、給食提供により部分的には成功しているが(Joseph 2002)、家父長制的なジェンダー規範のなかで、特に女兒において難しい。ILO の取り組みの中で運営されている現地の学校を視察させていただいたが(写真 5)、出席が男子児童に偏る事実是否めない。

インドでは、ほぼ全地域で女性人口が少なく、女性/男性の人口の比率に歪みが生じてきた(地図)。家父長制的な規範のなかで、男性に経済価値がより高く想定され、逆に女性は負担とされる。女兒に就学ではなく、労働による家計補助を期待する所以である。「産み分け」的な論理が作用することにもなる。



写真5: 就学復帰の試み(筆者撮影)



地図: インドにおける女性人口の割合(2011年): 男性 1000 人あたりの女性人数(Govt. of India n.d.)

おわりに

インドでは、採石・鉱山業の他に、飲食業、マッチ製造業、タバコ製造業などに児童(女兒)の労働の問題が指摘されてきた(Burra 1995)。しかし、これは、インドに固有の問題ではない。歴史的に見ると、世界の多くの地域で「安価」で「従順」な児童の労働を活用してきたし、それは、製造業の飛躍を支えてきた。そうした文脈について、生産組織や労働力管理、政治・財政制度、消費動態などを含めて、歴史的に冷静に読み解いて理解することが、まずもって肝要である(斎藤 1997; 大石 2007)。

主要な参照・参考文献

- 大石高志 (2007) 「インドにおけるマッチ産業と女性・児童の労働: 矮小化と弾力性の表裏関係」『外国学研究(神戸市外国語大学)』66号。
- 大石高志(2022)「近現代インドにおける市場経済化と資源・環境: 開放性と多様性の再編」藤田幸一・大石高志・小茄子川歩編『南アジアの人口・資源・環境』『南アジア地域研究』京都大学中心拠点
- 唐澤富太郎(1968)『図説明治百年の児童史』下巻
- 斎藤修(1997)「歴史のなかの児童労働: ヨーロッパ・日本・コロンビア」斎藤修『比較史の遠近法』NTT 出版
- Burra, Neera (1995), *Born to Work: Child Labour in India*, 1995. Govt. of India, n.d. *Census of India 2011: Sex Ratio and Child Sex Ratio in India*.
- Govt. of India (2023) *Indian Minerals Yearbook 2022*.
- ILO (2004) *A Decade of ILO-India Partnerships: Towards a Future without Child Labour*, New Delhi.
- Joseph, M.P. (2002) “Food insecurity and child labour: the Markapur experience,” Nira Ramachandran & Lionel Massun ed., *Coming to Grips with Rural Child Work: A Food Security Approach*, New Delhi.